



# 魚ノ川

うおのかわ



**36** 世帯、63人が暮らしている魚の川は、奥呉(久礼)地と下呉(久礼)地との間にある地区であるが「中呉(久礼)地」ではない。

戦国期に記された地帳帳や、江戸・元禄年間、さらには寛保年間(暴れん坊將軍でおなじみの徳川吉宗の時代)の記録には、奥久礼地村という表記も、下久礼地村という表記もあり、各々の耕作面積が記されている。それらから推察して、現在の魚の川は、下久礼地村の一部であったと考えられる。また、江戸・文化年間(第11代將軍徳川家斉の時代)に編纂された土佐藩の郷土誌には、奥久礼地川中流にある魚の川集落は、承応年間(第4代將軍徳川家綱の時代)に、地元郷士(農村に土着した武士)によって開墾されたのである。

もともと、奥と下しかなく、下の一部であった集落には集落名がすでにあり、近代になってこの集落が独立した時に、中呉地と改名する必要もなく、そのまま魚の川を名乗ってきたというのが「奥呉地と下呉地があった、その真ん中にある地区がどうして中呉地ではないのか?」という疑問に対する有力な答えかもしれない。ただ、承応年間に開墾された時に、なぜ「魚の川」と命名したのかはわからない。奥久礼地川には魚がたくさんいたからではないかという説もある。

魚の川は、奥久礼地を開墾した市川氏の分家たちによって形成されたとみられる。そもそも、奥久礼地は、一条

氏によって津野氏(現在の東津野や椿原を本拠地にしていた有力武士)が滅ぼされた時に、津野氏の重臣であった市川氏がこの谷に逃げ延び、開墾・開発した土地といわれている。後に、市川氏の分家たちが、新たな耕作地や生活基盤を魚の川に求めたのである。つまり、前述の「地元郷士」とは、奥久礼地を開墾した市川氏の分家たちのことである。大小権現山を水源とする奥久礼地川に沿って奥行き深い両地域は、水が豊富で、農耕にも生活にも適していたこともあり、密かに、また安定的に生きていくには好都合であったといわれている。現在もこの辺りに「市川姓」が多いのはそのためである。

さて、魚の川といえば、国の天然記念物に指定されている「ヒロハチシャノキ」である。その名の通り、葉の幅が広い変種のチシャノキで、樹齢は700年以上といわれている。根元に近い幹に乳房上のごぶがたくさんあり「乳もらいの木」といわれ、母乳にまつわる信仰が伝わってきたご神木である。



6月に白い花を咲かせる

町のうごき			四万十川の 水質状況			
(5月31日)	人口	前月比	出生	死亡	転入	転出
男	8,218	-14	男 1	15	12	12
女	9,162	-15	女 6	12	11	20
計	17,380	-29	計 7	27	23	32
世帯数	8,582	2	(5月中の届出)			
窪川地域	12,283人	大正地域	2,439人	十和地域	2,658人	
			適正值(mg/l) 6月8日			
			リン酸	≤ 1.0	測定範囲以下	
			硝酸	≤ 0.5	測定範囲以下	
			アンモニウム	≤ 5.0	0.104	
			アニオン活性剤	≤ 1.0	0.15	
			化学的酸素要求量	≤ 10.0	測定範囲以下	
調査: 大正(吾川) 資料: 四万十高校自然環境部						